



創立1880年

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

Tel 03-6302-1960

URL <http://tokyo.ymca.or.jp/>

発行所 公益財団法人

東京YMCA

発行人 菅谷 淳

東京YMCA

10
2018年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



障がいのある子どもたちを支援する「第32回東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン」を9月23日、都立木場公園で開催しました。前日まで続いた雨もあがり、まぶしい日差しと鮮やかな青空が広がる中、約300人のランナーと伴走者が力走しました。レース前の「こどもラン」には幼児小学生450人とその保護者、合計で約700人が参加。沿道をうめた応援者、ボランティア・スタッフ約150人を合わせると来場者総数は1500人を越え、今年もにぎやかな大会となりました。

この大会は1987年に東京で始まり、今年で32年目。今では全国20カ所のYMCAで年間1万人以上が走るイベントとなっています。

東京大会は1チーム6人、1人が1・3km走る駅伝です。ランナーが多様なことも特長で、企業の陸上部や地元の消防士など本格的なランナーや、園児の保護者、教職員、学生、障がいのある方など、皆が一緒に走るユニバーサルな大会です。おかげさまで支援金総額は490万円となりました。

物品による協賛も多数いただきました。ランナーにはパンや飲み物、タオルが提供されたほか、賞品や抽選会の景品として、日用品やおもちゃ、旅行券、カメラやパソコンなどを寄贈いただき、抽選会も盛り上がりました。皆さまの温かな心と笑顔に支えられて今年もこの大会が無事に開催できましたことを、心より感謝申し上げます。

▼2面「参加・協賛企業・団体一覧」

第32回 東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン 障がい者支援に 1500人集う

参加チーム インタビュー

■ ボランティア制度を利用 他の大会にも参加

ジョンソンコントロールズ株式会社
ビルテクノロジー&ソリューション 東京システム事業部
システム技術統括部 システム技術2部長 田中 浩二さん

当社は「YMCA国際賛助会（FCS C）」の会員でもあるため、この大会には10数年前から参加しています。当社には「Blue Sky Involve」というグローバルボランティアプログラムがあり、従業員のボランティア活動を会社が支援しています。従業員が自ら活動することによって、地域社会に貢献すると共に、リーダーシップを育成する目的もあります。そのため当社はチャリティーラン以外にも、「チャリティーゴルフ大会」や「餅つき大会」など、年間を通じてYMCAのいろいろな行事に参加しています。



チャリティーランでは、他社の皆さんと一緒に会場設営したり、社内外のさまざまなランナーと一緒に走ったりと、楽しみながらも充実した一日を過ごしています。

■ 新横浜から参加して5年目

岡谷エレクトロニクス株式会社
管理本部管理部 人事総務グループ 手塚 祐輔 さん

東京グリーンワイズメンズクラブからの紹介で、2014年から参加しています。本社は新横浜ですが、2016年に東京オフィスを開設したこともあり、2017年からは東京と新横浜の事務所のさまざまな部署の社員が集まり3チームで出場しています。今年はもう1チーム分、ユニフォームと共に協賛させていただきました。



チャリティーランは、ただ寄付するだけの社会貢献活動ではないところが魅力です。自ら走ることにより深く関わることができますし、さまざまな企業や団体、子どもたちも障がいのある方も一緒に走る大会は、一企業だけではできない企画です。ベテランから若い社員と一緒に走るの、社内の交流イベントにもなりますし、有意義な社会貢献活動であると思っています。

■ 楽しく走って役に立てれば“一石二鳥”

Donnelley Financial Solutions Japan 株式会社
ゼネラルマネージャー 木村 潔さん

この大会には10年ほど前から、「外国法共同事業法律事務所リンクレータース」他関連企業のメンバーとして走っていましたが、数年前から社内呼びかけ、Donnelleyとして出場するようになりました。速いチームではないですが、走るのが好きな社員を募って楽しく参加しています。



私自身も走るのが趣味で、100キロマラソンなどにも出場していますが、年をとるにつれて（？）こうして健康で走れることは幸せなことだと実感するようになりました。世の中にはさまざまな方がいます。社会貢献というほど偉いことはできませんが、皆が少しずつ行動すれば社会も変わるんじゃないかと思って参加しています。社員みんなが参加すると楽しいし、親睦にもなります。一石二鳥です。

■ 共に生きる社会の素晴らしさを実感

上田八木短資株式会社
代表取締役社長 上田 晶平さん

当社はCSR（企業の社会的責任）の一環で、東京YMCAの賛助会員として、東京YMCAの活動を支援しています。このチャリティーランには、2年前から社員が直接参加する形で、東京YMCAの障がい者活動を支援したいとの思いで、現在では3チームで参加しています。昨年から、チームの一体感を作るために毎回揃いのTシャツをこの日のために作成しています。終了後の懇親会も盛り上がり、翌年の健闘を誓うのが恒例です。



今回は青空の下、大勢の子どもたちや障がいのある方々が一生懸命走る姿を間近に見ることができ、共に生きることのできる社会の素晴らしさを実感することができました。一年に一度ですが、共に汗をかきながら、社会のありかたについても考える良い機会だと思っています。

理事 古田和彦

「気候変動とその影響力を軽減するため、緊急対策を講ずる」にいち早く呼応したのですが、注目したいのは、この推進主体の多くが営利企業であることです。環境問題への対応が企業の評価につながる時代になってきたということでしょう。

▼YMCAは企業とは異なりますが、これらの活動を世界の仲間と手を携えて実行していく責任があります。YMCAに連なる私たちは企業の手法にも注視し、協力できることは協力し温暖化防止の一翼を担いたいと思います。（東京YMCA元

が2016年に発効したのを受け、世界的に再生エネへの移行が加速しているというもので「太陽光や風力などの再生可能エネルギーで電気を100%まかなう目標を打ち出す企業や自治体が相次いでいる」とのこと。これまで20を超す企業・団体を取り組み始めたという▼7月には大手コーヒチェーン店が、世界2万8千店舗で使い捨てのプラスチックストローを2020年までに全廃すると発表しました▼SDGs（持続可能な開発目標）第13番目の目標「気候変動とその影響力を軽減するため、緊急対策を講ずる」にいち早く呼応したのですが、注目したいのは、この推進主体の多くが営利企業であることです。環境問題への対応が企業の評価につながる時代になってきたということでしょう。

赤△三角

8月の一般紙に「再生エネ100%目標広がる」という記事が載りました。温暖化防止のための枠組み「パリ協定」

西日本豪雨災害 ボランティア報告

復旧へ 道のり遠く



上流の砂防ダムが決壊により大きな被害を受けた安芸郡坂町小屋浦の街並み。今も至る所に土砂が残る。

西日本豪雨から3カ月。今も土砂が残る被災地で、広島YMCAは安芸区のボランティアセンターと協力して全国のボランティアを受け入れ、支援活動を継続しています。東京YMCAは9月、職員や学生、ボランティア計6人を派遣。被災地の様子を見ました。

埋もれた家財に被災の重み痛感
西東京センター 沖津 桃

私は9月10〜14日、民家の間の土砂を取り除く作業をしたのですが、下水の混ざった土砂は悪臭が強く、また粘土状に固まった土もあり作業に時間がかかりました。何より辛かったのは、多くの家を飲み込んで流れてきた土砂のため、掘り起こすたびに家具やおもちゃ、犬の首輪など、たくさんの家財が出てきたことです。失われた生活や被災の重みを実感して心が苦しくなりました。

とはいえどうすることもできず、家財を分別して集積所に運び続け、シヨベルカーがかり集めていく様をいたたまれない思いで見ている時、集積所のフェンスに、岩手県の方々からの「頑張ってください。乗り越えましょう」「応援しています」といったメッセージが張り出されているのを見つけた。シブブルな言葉で、だが温かさが心にしみま

支援の必要性、伝えていきたい
江東センター 加藤 学

私が現地に行ったのは9月24〜28日。被災からほぼ3カ月経った時期で



土砂を土のうに詰めて運び出す作業。庭一軒分です。200袋になった。したが、小屋浦はやっと道路が復旧したばかりで、全壊半壊の家がいた所に並んでいました。砂防ダムの決壊で流れてきた直径7mもの岩。それによって折れ曲がった壁。土砂につぶされた車など、間近で見る被災地は想像以上でした。

初日には1・5m近く浸水したお宅に行き、軒下の泥かきをしました。泥を土のうに詰め込み、トラックに積んで運び出すのですが、庭の泥だけでも土のう約200個にもなり、5人で作業しても2日間かかりました。そのほか、坂町の仮設住宅で炊き出しもしました。食事と一緒に、熊本

の小学生から贈られてきたメッセージ入りの団扇を配りましたが、「必ずみんな笑顔になるから、がんばってください」などと書かれた団扇を、被災地の方々は涙ぐみながら、喜んで受け取っていました。

現地に行ってみないとわからないことがたくさんありました。私にできることは限られますが、被災地の方々だけではどうにもならない状況だということ、支援は欠かせないことを自分なりに伝えていきたいと思っています。

引き続き西日本豪雨災害のため募金を受けています。ご協力をお願いします。

【振込先】 三井住友銀行 神田支店 普通 7656469

公益財団法人東京YMCA

*お名前の前に「ニシニホン」とお書きください。

【お問合せ】 東京YMCA会員部 TEL 03-6278-9071

支援の近況などは、随時ホームページでお知らせします。

<http://tokyo.ymca.or.jp/>

【1面より】

第32回東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン

2018年度参加・協賛 企業・団体一覧

●【全国協賛】

- ・三菱商事株式会社
- ・富士通株式会社

●【協賛】参加・協賛

- ・株式会社カーギルジャパン
- ・富士ゼロックス端数倶楽部
- ・ジョンソンコントロールズ株式会社
- ・岡谷エレクトロニクス株式会社
- ・ビザ・ワールドワイド・ジャパン株式会社
- ・上田八木短資株式会社
- ・東京トヨペット株式会社
- ・フットマーク株式会社
- ・Donnelley Financial Solutions Japan 株式会社
- ・株式会社アサヒ・エコキャリア
- ・東京・フロストバレーYMCAパートナーシップ
- ・キャセイパシフィック航空日本支社
- ・アメアスポーツジャパン株式会社
- ・山崎製パン株式会社
- ・FVジャパン株式会社
- ・ライオン株式会社
- ・イオン株式会社
- ・株式会社昭和電気産業
- ・コストコホールセールジャパン株式会社
- ・有限会社レッドウィング
- ・株式会社恵愛
- ・GOLD'S GYM
- ・株式会社ロータスインターナショナル
- ・国際青少年センター東山荘（日本YMCA同盟）
- ・ワイズメンズクラブ国際協会 在京ワイズメンズクラブ
- ・YMサービス株式会社
- ・しののめYMCAこども園
- ・東京YMCA江東コミュニティセンター／江東YMCA幼稚園
- ・東京YMCA東陽町コミュニティセンター
- ・東京YMCA西東京コミュニティセンター
- ・東京YMCA山手コミュニティセンター
- ・東京YMCA国際ホテル専門学校
- ・東京YMCA南コミュニティセンター



こどもランには、幼児小学生と保護者総勢700人が参加しました。



コスチューム賞受賞の(株)カーギルジャパンの皆さん



伴走者と一緒に頑張りました

受賞一覧（カッコ内は団体名）

- 1位 : しののめレッド（しののめYMCAこども園）
- 2位 : ピンクパンサー（東京YMCA山手センター）
- 3位 : 富士ゼロックス陸上部（富士ゼロックス端数倶楽部）

特別賞（32位）：チーム ブラブロ（三菱商事(株)）

最高年齢賞 : 富士ゼロックス端数倶楽部（富士ゼロックス端数倶楽部）

コスチューム賞：ワンダホー☆サンデー（(株)カーギルジャパン）

三菱商事DREAM AS ONE賞：TEAM24（東京YMCA西東京センター）

隠しタイム賞 : はやぶさ（東京YMCA江東センター／江東YMCA幼稚園）



総主事カフェ

東京YMCA総主事

菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。ニューヨーク大学のリハビリテーション研究所の壁に、作者不詳で以下の詩が書かれています。

「（1）大きなことを成し遂げるために強さを与えてほしいと神に求めたのに、慎重深く従順であるようにと弱さを授かった。（2）より偉大なことができるようにと健康を求めたのに、命に感謝できるようにと病弱を与えられた。（3）幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。」

（4）人々の称賛を得ようとして成功を求めたのに、神様の存在に気付けるようにと失敗を授かった。

話が変わりますが、今から10年ほど前、「余命1ヶ月の花嫁」というドキュメンタリー番組がTBS系テレビで放映されました。主人公である長島千恵さんは24歳ながら末期の乳がんに冒され、宣告された余命は1ヶ月。しかし「がんと闘う自分の思いを同世代の人たちに伝えたい」と番組作成に協力されました。

千恵さんの夢は「ウエディングドレスを着ること」でした。彼女の夢を叶えるため、友人たちが彼女の恋人との模擬結婚式を計画し挙式となりました。そしてこの結婚式から1ヶ月後千恵さんは亡くなりました。この実はその後映画にもなったのでご存知の方も多いと思います。

亡くなる前に千恵さんが言っていた言葉が印象的でした。

「（5）人生を楽しむとたくさんのものを求めたのに、あらゆることを楽しめる命をすでに授かっていたことに気付いた。求めたものは何一つとして与えられなかったが、願いは全て聞き届けられた。自分は神様の意にそわぬ者であるにもかかわらず、言い表せない祈りは全て叶えられた。私はあらゆる人の中で、もっとも豊かに祝福されていたのだ。」

訳者すらわからないまま世界に広まったこの詩を、私は壁にぶつかる度に思い出します。

話が変わりますが、今から10年ほど前、「余命1ヶ月の花嫁」というドキュメンタリー番組がTBS系テレビで放映されました。主人公である長島千恵さんは24歳ながら末期の乳がんに冒され、宣告された余命は1ヶ月。しかし「がんと闘う自分の思いを同世代の人たちに伝えたい」と番組作成に協力されました。

千恵さんの夢は「ウエディングドレスを着ること」でした。彼女の夢を叶えるため、友人たちが彼女の恋人との模擬結婚式を計画し挙式となりました。そしてこの結婚式から1ヶ月後千恵さんは亡くなりました。この実はその後映画にもなったのでご存知の方も多いと思います。

亡くなる前に千恵さんが言っていた言葉が印象的でした。

BS系テレビで放映されました。主人公である長島千恵さんは24歳ながら末期の乳がん

に冒され、宣告された余命は1ヶ月。しかし「がんと闘う自分の思いを同世代の人たちに伝えたい」と番組作成に協力されました。

千恵さんの夢は「ウエディングドレスを着ること」でした。彼女の夢を叶えるため、友人たちが彼女の恋人との模擬結婚式を計画し挙式となりました。そしてこの結婚式から1ヶ月後千恵さんは亡くなりました。この実はその後映画にもなったのでご存知の方も多いと思います。

亡くなる前に千恵さんが言っていた言葉が印象的でした。

話が変わりますが、今から10年ほど前、「余命1ヶ月の花嫁」というドキュメンタリー番組がTBS系テレビで放映されました。主人公である長島千恵さんは24歳ながら末期の乳がん

に冒され、宣告された余命は1ヶ月。しかし「がんと闘う自分の思いを同世代の人たちに伝えたい」と番組作成に協力されました。

千恵さんの夢は「ウエディングドレスを着ること」でした。彼女の夢を叶えるため、友人たちが彼女の恋人との模擬結婚式を計画し挙式となりました。そしてこの結婚式から1ヶ月後千恵さんは亡くなりました。この実はその後映画にもなったのでご存知の方も多いと思います。

亡くなる前に千恵さんが言っていた言葉が印象的でした。

話が変わりますが、今から10年ほど前、「余命1ヶ月の花嫁」というドキュメンタリー番組がTBS系テレビで放映されました。主人公である長島千恵さんは24歳ながら末期の乳がん

に冒され、宣告された余命は1ヶ月。しかし「がんと闘う自分の思いを同世代の人たちに伝えたい」と番組作成に協力されました。

千恵さんの夢は「ウエディングドレスを着ること」でした。彼女の夢を叶えるため、友人たちが彼女の恋人との模擬結婚式を計画し挙式となりました。そしてこの結婚式から1ヶ月後千恵さんは亡くなりました。この実はその後映画にもなったのでご存知の方も多いと思います。

でした。「同年代の人たちが『やることない』『ひま』といっている1分1秒が私にとっては宝物なんです」。

私たちは自分に命があるのは当たり前なこと

で、そこからさらに強さや健康、富や成功、快樂などを求めようとしています。そしてそれらが手に入らないと怒りいら立ち、不平不満を言います。しかし限られた時間とわかつた時、はたと気づきます。自分の命は自分が勝ち取ったものではなく神様から与えられたものであり、死は命を奪われるということではなく、神様にお返しすること。壁の詩も千恵さんの言葉も、だからこそ命に感謝して今を大切に生きることが重要だと伝えたかったのだと思います。

バングラデシユの子どもたちを支援

園児・会員等196人が街頭募金活動

9月15日、雨の降る新宿駅周辺に、東京YMC



各国語で募金をアピールした「にほんご学院」の留学生と「社会体育・保育専門学校」の学生たち。

人が集まり、一斉街頭募金活動を行ないました。この募金は主にバングラデシユYMC Aが実施している経済的に困難な状況にある子どもたちのための教育支援活動をサポートすることを目的としています。

街頭に立った老若男女は日ごろYMC Aでの活動こそ違え、ボランティアの心意気は同じ。新宿駅の東、西、南の主要出口にわかれ、募金をスタート。当初、傘をさした通行人はなかなか足を止めてくれませんでした。雨足が遠のくにつれ



お預かりした募金は、バングラデシユYMC Aの教育支援活動に用いさせていただきます。

バングラデシユYMC Aは、経済的に困難な状況にある子どもたちのため、NFPE (Non Formal Primary Education) という私設の小学校を国内7カ所で運営しています。家事や農業で忙しいなどの事情から公立の学校に通えない子どもたちに、短時間で無料で通学できる学習の場を提供すると共に、SSC (Secondary School Certificate) という奨学金制度も設け、中学校程度の卒業資格を得られるよう経済的に支援すると共に学習指導も行なっています。

り、おかげさまで21万3,467円の募金が寄せられました。毎年9月に行なっている街頭募金活動ですが、これは日頃は交流のないメンバー同士が、行きかう人々とともに平和と共生について考える機会でもあります。募金してく

ださる方々と笑顔を交わすとき、素直な感謝の気持ちとともにバングラデシユの子どもたちへの思いを共感できた喜びを覚えます。ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。(国際委員長 浅羽俊一郎) ▼4面感謝報告

シリーズ 資料室の窓から(103)

聖書輪読が運動になる

齊藤 實 本会元副総主事



1953年山中湖センターで開催された聖書輪読キャンプ

1945年夏から足掛け8年間、日本は被占領国であった。その初めの5年間、東京YMC Aは会館を占領軍に接収され、仮住まいを千代田区富士見町に置いた。その間、会員活動が本務の東京YMC A運営は、当時は副総主事であった42歳の木本茂三郎が担った。1946年4月によつと発行できた機関紙『東京青年』再刊第一号で、木本は「日本の再建に何をすべきや」と題する一文で「みんなで聖書を読み合おう」と述べ、職場での聖書輪読会を提唱した。木本はその著『昭和の東京YMC A』で言う。「私の情熱をもってやつたものに聖書輪読のことがある。まずライオン樹磨本社において、日本橋聖書会の名で1946年6月11日より毎週一回正午に弁当をたべて集りを持った。亀徳氏がマルコ伝を指導された。これが戦後の職場の集りの最初のものではあった」と。1951年から日本YMC Aが全国規模で展開した「五カ年前進運動」は目標に「聖書輪読グループの増大」を加え、「現在の登録グループ数60を300に」とした。東京YMC A戦後復興理念の原点であったこの「聖書輪読会」は夏季キャンプという手立てを得て都内で一挙に広まる。木本茂三郎発案の「聖書輪読キャンプ」初

回を山中湖畔で開いたのは、1951年8月の2泊3日。参加費500円の他に米8合持参であった。日本基督教団田園調布教会岡田五作牧師が木本茂三郎副総主事と二泊三日を指導した。キャンプの聖書グループ指導には、富士電炉工業専務後藤安太郎、白洋舎社長五十嵐丈夫、石川歯車専務中島守信、日本YMC A同盟相原和光が当たった。1962年7月、本所緑星教会入江義伸牧師指導の第12回で輪読キャンプは使命を終えた。その間、日本YMC A同盟は聖書輪読運動テキストを発行して運動展開を支援続けた。

「災害スタディ」開催

江東区防災課係長・今井知明氏基調講演

災害時に備え、“地域力”を高める

「いざというとき、助けてくれるのは近所の人」という基本に立ち、地域の特性を知り、災害時に想定されることをみ

江東区防災課係長の今井

知明氏から「江東区の防災対策」と題して、江東区で想定されている水害や液状化などの災害と、そのためにできる対策についてお話いただきました。

その後、東陽町を防災の観点から見よう！と「街歩きプログラム」を実施。残暑厳しい中でしたが、YMC A関係者のみならず、行政、警察

企業の方々など14団体39名の方が参加し、街の状況をチェックしながら歩きました。



「街歩きプログラム」では、災害時に危険な場所や使える資源などを把握しながら歩く。声をかけやすい人間関係づくりも重要な目的であり、YMC Aは昨年にも実施した。

学校が辛い子どもたちへ 居場所提供

“夏休み明け問題”に特別libby



libbyにきた子どもたちは、スタッフと話したりゲームをしたりと思いの時間を過ごした

不登校など青少年の居場所「東京YMC Aオーブンスペースlibby」は、長期休み明けに誰でもワンコイン(500円)で1日過ごせる「特別libby」を設けています。今年は8月末から9月初めの5日間実施。訪れた子どもたちは、一人でくつろいだり、ゲームや料理をしたり、スタッフと話をしたりなど思いの時間を過ごしま

した。初めてlibbyを訪れる人や久しぶりに来た人もいて、少しにぎやかなlibbyでしたが、スタッフたちはいつも以上に一人ひとりの気持ちに寄り添い、どの人にも安心できる場所であるよう願って接しました。

夏休み明けのこの時期は一年の内で子どもの自殺が最も多く、「9月1日問題」「夏休み明け自殺」などと呼ばれ、昨今

libbyと高等学院支援へチャリティーコンサート



「空も飛べるはず」を歌う生徒と保護者

「東京YMC A libby・高等学院を支えるためのチャリティーコンサート」が9月28日、日本基督教団豊南坂教会で開催され約170人が来場しました。

このコンサートは、本会理事でオルガニストの飯靖子(いひ・せいこ)さんが発起人となり、こ

ンサートの最後に「空も飛べるはず」を歌う生徒と保護者

子息でヴィオラ奏者の飯頭(いひ・あきら)さんと共に3年前から開催しているもの。今年も心に響く荘厳なバイブオルガンとヴィオラの演奏を披露いただきました。

例年コンサートの最後には、高等学院の生徒もステージにあがり、会場の方々と一緒に歌いますが、今年は保護会「フアミリアの会」の皆さんや教職員のオカリナも加わり、ピアノ、ドラム、ギターなどたくさんの楽器の伴奏でスピッツの「空も飛べるはず」を歌いました。

皆さまのご協力に感謝します。(高等学院職員 吉岡由見子)